

港区立郷土歴史館

歴史館だより

関東大震災と公衆衛生院

川上 悠介
(学芸員)

今年[◆]は、大正12(1923)年に起きた関東大震災から100年が経つ節目の年です。関東大震災時、港区内でも大きな揺れと新橋エリアを中心とした火災が発生し、甚大な被害を受けました。東京ではこれをきっかけに、近代的でより強固な防災都市づくりを進める機運が高まります。そして、帝都復興事業として区画整理、幹線道路の整備、橋の整備、公園の整備、小学校を鉄筋コンクリート造に建替えるなど、災害に強いまちづくりが昭和5(1930)年まで実施されました。ここでは、郷土歴史館の入る旧公衆衛生院(ゆかしの杜)の建物及び、組織としての公衆衛生院と関東大震災の関連を紹介します。

関東大震災の罹災者救護と被災地の復興時に、病傷者の医療、防疫および上水、下水、その他環境衛生施設の整備計画など、公衆衛生活動の重要性が広く世間に認められるようになったことを契機に設立された研究施設が公衆衛生院でした。

設立資金は、アメリカのロックフェラー財団の寄付によるものです。同財団は、第一次世界大戦後の復興援助を目的に、世界各国の近代的公衆衛生活動、とくに専門職員の教育訓練施設設立の援助先を探していました。その折に、南関東を中心とした地震災害が発生し、日本政府は同財団から復興援助の申し出を受けます。しかし、日本国内での協議に時間がかかり、正式な援助要請が政府から出されたのは昭和5年でした。

公衆衛生院建物の建設事業は、東京大学の設計で知られる内田祥三^{よしかず}を設計者として昭和5年から開始。内田はロックフェラー財団と協議をしながら設計を進め、財団から認証を得た後、昭和10年3月に建設工事に着工。昭和13年10月に完成となりました。

組織としての公衆衛生院は、建物の完成に先駆けて昭和13年3月20日に官制の公布をもって設立となっています。同年1月11日に設置された厚生省(現・厚生労働省)の管轄で活動を始めることとなりました。

公衆衛生の研究施設であった証が現在も建物内に

残されています。建物の前庭にある水盤は、浄水場のミニチュア版実験施設として作られたもので、各地の水道局の技師が公衆衛生院へ来て、自分たちの町の浄水施設に見立てて様々な実験を行っていました。日本の水道水が安心して飲めるのは、こうした研究の成果かもしれません。また、教室を除くほとんどの部屋に洗面台が設置されていたこともこの施設の特徴で、現在は、3階の院長室・次長室・常設展示室内の休憩室で見ることができます。

このほかに、当時の防火対策も確認できます。2階と3階にある図書館書架には、入口の扉上部と各窓に防火シャッターが設置されていました。現在は、入り口部分の扉上部のシャッターのみ残されています。万が一の際に、書架が延焼から防げるような配慮です。この建物に限らず同時代の図書館にもこういった設備を見ることができますが、設計者の内田も関東大震災で自分の大学の図書館が焼失するという体験をしており、その経験がここに反映されています。

以上のように、公衆衛生院は関東大震災の経験を踏まえて作られた施設であることがお分かりいただけたと思います。郷土歴史館では、7月15日から夏休み企画展「港区たてものウォッチング～お寺や洋館をたずねてみよう～」を開催します。公衆衛生院で実際に使われていた防火シャッターや、関東大震災についても子ども向けに解説していますのでぜひお越しください。防災対策を過去の事例から学んでみてはいかがでしょうか。



3階図書室入口 上部の箱がシャッターボックス。右手壁面にシャッターの巻き上げ機構が残されている。



港区立郷土歴史館

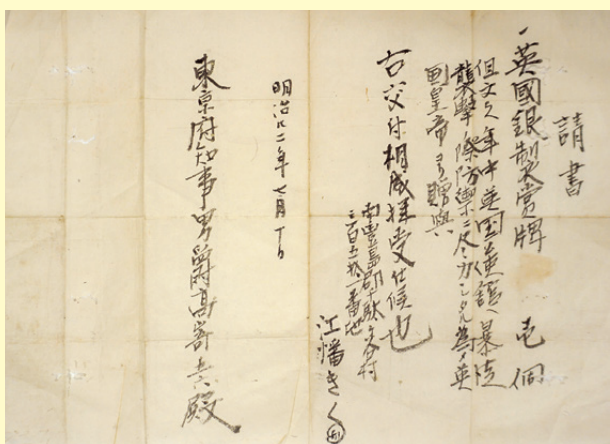
歴史館だより

東禅寺事件メダルの授与から見る日英関係

岡谷 成康
(学芸員)

『歴史館だより』では、以前に2度、幕末期に起きた「東禅寺事件」について、関係する資料や人物を取りあげた記事を掲載しています（『歴史館だより』Vol.06-2、及びvol.11-1を参照）。

今回は、文久元（1861）年の事件当日に東禅寺（当時の英国公使館）を警護していた者やその遺族へ、英国政府から感謝のメダルが、明治22（1889）年になって授与された経緯を紹介し、メダルの授与を通じて、当時の日英関係を考察します。なぜ事件発生のおよそ28年後にメダルの授与が実現したのでしょうか。



江幡さくが提出した請書の写（当館蔵）

この文書は、明治22年7月10日付、江幡吉平の遺族である江幡さくから、東京府知事・高崎五六宛に提出された請書の写です。英国公使館の警護に尽力した功績として、英国から贈られた銀製メダルを受け取ったとあります。これにより、東京府を通じて、さくへ銀製メダルが授与されたと分かります。当時のさくの住所が、東京府南豊島郡千駄ヶ谷村であったことを踏まえると、各々へのメダル授与は、授与される者の住所がある道府県の長を通じて行われたのでしょうか。

では、メダルの授与が行われる以前、日英間ではいかなるやり取りがあったのでしょうか。事件当時、幕末期の日本は西洋諸国との外交をめぐり、国内が非常に不安定な状況で、この時のメダル授与は、見送

られたことが既に明らかになっています。それ以降、メダルの存在は長い間、日英間で忘れ去られていました。

事態が動き出した発端は、明治22年5月1日に英国公使のヒュー・フレイザーが来日する少し前、当時の英国公使館政治部において、がらくた整理のため、長年閉じられていた金庫が開けられ、メダルや感謝状が発見されたことでした。その後、同29日にフレイザー公使から日本の外務省に対して、警護を担当していた本人か、その遺族へメダルを授与したいと打診されます。

これを受けて出された6月14日付の外務大臣・大隈重信の照会文書（賞勲局総裁・柳原前光宛）には、文久3年には既にメダルが英国公使館にあったことや、メダルは81名分あることが、フレイザー公使から伝えられたとあり、55名分の住所・生死が判明したことなどが記されていました。その後、同19日には内閣総理大臣・黒田清隆が明治天皇に対して、メダルを英国から受領する旨の裁可を仰ぎ、メダルの受領が決定されました。

管見の限り、英国公使館側の史料からは、メダルの発見は偶然であって、授与の打診に関して、政治的な意図を確認することはできません。一方で、当時の日英間の最重要課題として、幕末に結ばれた不平等条約の改正問題がありました。フレイザー公使は、自身の着任と、日本側との交渉開始に当たり、友好的な雰囲気を作ろうとし、日本側もその意を汲んだものと考えられます。東禅寺事件のメダルは、幕末から時を隔てた明治22年になって、日英友好の役割を果たすことになったのです。

参考文献・史料

メアリー・フレイザー著、ヒュー・コータツツィ編、横山俊夫訳『英国公使夫人の見た明治日本』（淡交社、1988年3月）

サー・ヒュー・コータツツィ編著、日英文化交流研究会訳『歴代の駐日英国大使 1859-1972』（文真堂、2007年7月）

「公文類聚 第13編 明治22年」（国立公文書館蔵）